

平成24年度 岡山県国際理解教育研究会
備前支部 研修会

上記の会が、8月27日(月)に岡山市立妹尾小学校で開かれました。まず、栗坂祐子備前支部長(妹尾小学校長)が、挨拶をしました。



今回の発表は、次の2名でした。

- ① 津嶋邦彦 先生(平福小学校) サンパウロ日本人学校
 - ② 岡 浩史 先生(岡山後楽館中学校) シラチャ日本人学校
- この順番で、約1時間の講座になりました。



まず最初は、岡山市立平福小学校教頭の津嶋邦彦先生でした。先生は、ブラジルのサンパウロ日本人学校に赴任されていました。初めにブラジルの表記は **Brazil** のほかに、ポルトガル語では **Brasil** となることや、ブラジルの面積が日本の約23倍もあること、3年間過ごしたサンパウロの人口は東京都とほぼ同じでも人口密度はサンパウロの方が高いことなど、ブラジルとサンパウロの基礎情報から紹介が始まりました。

教育の面では、ブラジルの子供たちは午前か午後かのどちらかで学校生活を送るシステムとなっているようです。学校に通わない時間には日本語学校へ通う日系人の子供たちがたくさんいて、そこでは日本語だけでなく日本の文化も学ぶそうです。

気になる物価は為替相場の影響が大きく、赴任当時は1リアル約50円、通勤用のフィットは、発売から3年経過した中古車であっても日本円にすると200万円以上もしたとのこと。ちなみに赴任の前年は、1リアルが70円くらいだったとのこと。その他、プラスチック製品も高価だったそうです。一方、現地のアボガド、パイヤ、マンゴーなどの果物類はたいへん甘くて大きい上に安価なのだそうです。

ブラジルは私たち日本人にとっては、地理的な距離とは裏腹に、たいへん身近な国です。それは在日ブラジル人が27~28万人いたり、ブラジルに日系人が150万人もいたりすることにもみられます。ブラジル国内を旅行したとき、あちこちで日本名の店を発見され、たいそう驚かれたそうです。

日本とのつながりを示すものに毎年7月頃に盛大に開催される「日本祭り」があります。そこには日本の各都道府県をふるさとにもつ日系の人々が腕をふるった自慢の料理がお目見えします。これは日系社会における一大イベントです。岡山県の店では、岡山県から取り寄せたきびの入った吉備団子や祭り寿司が販売されているそうです。



サンパウロ日本人学校のことには話題を移します。そこでは小学部と中学部の児童生徒が在籍していて、1980年代前半には、在籍者が約千人もいました。後はずっと減り続け、近年は160人くらいまでになっていました。しかし、ようやく2011年に200人を越え、増加傾向がうかがえたとのこと。

学校はサンパウロの中心から南西にやや外れたところにあり、児童生徒は居住地から約20kmの道のりを、1時間ほどかけてスクールバスで登下校しています。児童生徒数増に伴い、スクールバスは13台になりました。



学校の敷地の広さは、東京ドームの2.5倍ほどもあり、たくさんのコーヒーの木のほかにはバナナ園もあります。毎年5月末頃に行われる「コーヒー狩り」はサンパウロ日本人学校で人気のある行事なのだそうです。

児童生徒の安全に関しては、校外行事では警備員が同行していたそうです。学校も安全のため、高い塀に囲まれています。

現地校との交流は日本語学校以外にも盛んに行われています。交流の相手はサンタクルース校や日本人学校の近くにあるコンコルジア校などです。交流内容の一例としては、音楽の交流を行っていたそうです。



指導の重点目標は、「豊かな心を育むため、互いに認め合う学級経営を基盤にアミーゴス班活動・委員会活動・生徒会活動を進めること」「学ぼうとする意欲を高め、学んだ力を発揮させるよう授業等の工夫・改善に取り組むこと」「何事にもねばり強く取り組む児童生徒の育成及び基礎体力の充実を図ること」です。総合的な学習の時間には、ポルトガル語の学習を含め現地理解をはかる内容の学習をしていました。

英検や漢検などは学校を会場にして受験することができました。しかしブラジルの税関検査が厳しく、日本から送られてくるテスト用紙が試験当日に無事間に合うかということにはずいぶん気をもまれたそうです。

児童生徒の放課後の過ごし方ですが、現地では安全の面から屋外に子供たちだけで遊びに出かけられません。友人の家に連れて行ってもらって遊んだり、サッカースクール等の習い事をしたりして過ごしているようです。

日々の仕事では、ビザの更新手続きには時間がかかり、たいへん困ったそうです。PTAとの連携では、スクールバスの運行のこと・PTAのボランティア活動のこと等々で、電話やメールで毎日連絡をとっていたとのこと。その他に、教員が年々減員となったため、現地採用教員の募集を試みましたがなかなか決まらず、日本からの採用に踏み切ることになったことも紹介されました。

ブラジルでの教科指導の経験は、今回の発表や日々の実務の中で生かしているそうです。ただ何よりもブラジルの方々との様々な交流や助けてもらった体験等があり、いろいろな形でブラジルやブラジルの人々と関わりをもっていきたいと考えているとのこと。



次に、岡山市立岡山後楽館中学校の岡浩史先生が話をされました。先生は、タイのシラチャ日本人学校に赴任されていました。最初にシラチャの概要を説明されました。近くに貿易港があり、もともと小さな町。(パタヤという町はもともと米軍がハワイのような保養地にしたかったところだそうです。)有名なタイガーズーがあります。象は身近な存在で芸をよくしていました。



派遣が決まった前年の12月に妊娠が分かり、不安はありましたが、義理の母に「どこで生んでも同じ。」と言われ踏ん切りが付いたようです。また、これを指導の機会と捉え「命の授業」の出前授業をしました。エコーの写真を見せたり、お腹の子どもの心臓の音などを聴診器で聞かせてみたり(写真)、実際に10kgの砂袋を身につけてみたりしました。ニュースでも時々取り上げられた洪水も体験シライフラインを失った経験もしました。

開校の日に王族の方が来ることになり、来賓どころではない大変な対応になったことも良い思い出のようです。日本人学校の方は、年々児童生徒が増える中、いろいろな事情で派遣教員が増えないことがあり、その中で岡先生がいろいろな立場で仕事を兼務されていたご苦労をお聞きしました。校長先生が「教育目標や学年目標を絵に描いた餅にするな」という考えで、教育課程等の達成状況を精細に調査し、生徒の様子も合わせて頻繁に通信でお知らせし、保護者との信頼関係も培っていきました。

それから、チェンマイ補習校の巡回指導として「ガジュマルの木の下で」＝「バーン ロム



サイ」, HIVにかかった子の施設を紹介されました。現地での厳しい実情も話されました。

次に校外学習として、ゴミの処理場, JALWAYSの職場訪問, 珊瑚の養殖体験などを行っています。交流学习では、タイの現地校で、数学・道徳・棒術の授業を受けたり、お互いの国の文化を紹介したりしました。日本人学校の生徒は、お茶、華道、竹馬などを紹介しました。日本人学校のお礼は、合唱でしたが、タイ側のお礼は毎週習っているタイ舞踏でお返しをしてもらいました。その取組の違いに驚かされました。



今後は、グローバルなものの考え方ができるようになりたいと思っています。例えば、タイでの出産は、帝王切開をする人の割合が多く、タイ人によっては、「日本人は、何で痛いのが我慢するの?」というようです。きめ細やかな指導の大切さ、個別指導や道徳の指導も大切にしていきたいと思っています。自分自身も含めて日本文化を愛し、勉強していきたいです。激務の時期に、つつい無言で仕事をしていたので、どんなに仕事が増えてもコミュニケーションを大事にすることを心がけたいと思いますと話されました。

閉会のあいさつは、菅野和良備前支部副支部長でした。発表の二人の先生の国はどちらも暑い国ですが、今年の日本の夏は猛暑で、どちらが暑く感じるか投げかけられていました。